

学校園だより

良樹細根

丹波篠山市立
たまみず幼稚園
城北畑小学校
5月の3



筆算の仕方学んでいます

2年生では、2位数同士の加法とその逆の減法の筆算を学習しています。この日(21日)は

36-24の計算の仕方を、まずは具体物を使ってから答えを確かめたのち、筆算で答えを出しました。手順として、①位をそろえる②定規で線を引く③一の位を引く④十の位を引く、この4つの工程も確かめながら学習を進めました。

○ ○ 児童の振り返りメモから ○ ○

●ひきさんのひっさんは、たしさんのひっさんとあまりかわらなかつ

(具体物を使いながら説明) ので、びっくりしました。●ひっ算でのひきさんは、はじめてだからまちがえてたしさんにしそうでした。でも、まちがえなくて よかったです。●くらいをそろえて書くことと、一のくらいは、 $6-4=2$ のことと、十のくらいは $3-2=1$ とわかりました。●今日、ひき算でもひっさんができると分かったし、一のくらいをひく、十のくらいをひく、がわかりました。●ひき算もたし算のひっ算も計算のしかたがいっしょってわかりました。●くらいをそろえると、ひき算のひっ算がかんたんでした。

次回から、繰り下がりのある筆算の計算の仕方を学習し、練習問題をこなしていきます。机上の計算にならないようにするためにも、2年生の保護者の皆さんに生活場面でも使えるように、お子さんに意図的に問題を出してください。算数って生活にも使えるんだ、という意識を持つことが出来ればGoodです!



遊びは学び

雨降りの日が続いていますが、この日は曇天であったため、久しぶりに校庭で遊びました。プール横の雲梯に水たまりを発見しました。園児用移植ごてでチョコレート色になった泥水をすくってはまた戻

す子、戻すことによってできる波紋を眺める子、スープと見立ててお皿に入れる子、ハヤシライスでしょうか、砂にスープをかけようとする子、トノサマガエルを見つけ捕まえようとする子、様々な活動が見られました。五感は幼児期にとぎすまされます。指導者はこのことを意識しながら日々の保育活動にあたっていかなければなりません。「臭覚・視覚・聴覚・触覚・味覚」の五感。土や雨、木の香りを感じたり、鳥のさえずりやカエルの声に耳を澄ましたり、季節で変わる植物の緑を眺めたり、小動物を触ったときのぬくもりや肌触りを感じたり、本物の果樹の甘み、苦み、渋みなどを感じたりなどなど、五感を働かせながら生き生きと活動してほしいです。中国のことわざ「聞くことは、忘れることなり、見て聞くことは、覚えることなり、見て聞いてやってみることは理解することなり」というのがあります。自然という環境に積極的に働きかけ、降園前に「ああ、今日も思いっきり遊んだ! 楽しかった! 明日も幼稚園行きたい!」そんな声が聞けるよう保育を展開していきます。・・・園庭の芝も伸びてきました。果樹の木も大きくなってきました。園庭は季節を感じる窓でありたいです。



タブレットを活用

21日(金)3年生の体育の授業で器械運動に取り組みました。中学年で身に付ける事項は次の通り

です。①マット運動では、回転系や巧技系の基本的な技をすること。②鉄棒運動では、支持系の基本的な技をすること。跳び箱運動では、切り返し系や回転系の基本的な技をすること。

この日は、前回に引き続きタブレットを持ち込み、前転に挑戦しました。一人一人に与えられたパスワードを入力した後、二人一組になって相手が前転をする動きを動画で撮影します。前転するときの動きのポイントをチェックしていきます。(ア)膝を曲げる(イ)後頭部をマットに付ける(ウ)背中を丸めて、おへそを見て回転する(エ)足をお尻にくっつけて回転する(オ)手を前に出して立ち上がる

この4点を動画を再生して自分や相手の技を細かく点検していきました。「あっ、頭のとっぺんがマットに着いている。」「これは、後頭部から入っている。」等と確認することが出来、自分自身の評価へとつながっていきました。次はどのポイントを改善していけばよいのかという学習意欲にもつながり、情報機器の有効な使い方の一例でした。



20日(木)付け丹波新聞に、サル研究の世界的権威である河合雅雄さんが逝去された記事が掲載されていました。新聞記者の原稿を要約するのはいささか失礼ではありますが、情報化社会を生きる私たち、特に現代の子どもたちを思い浮かべずにはいられません(以下、要約)

寝床に伏せる日も多く病弱だった先生はの小学校時代は、半分ぐらいしか小学校に行けなく、学校の成績は悪くさんざんな通知票でありました。しかし、体調がいいときは釣りや虫取りをするなど、自然にどっぷりつかり、家では、ニワトリ、犬、シマリス、ジュウシマツ、文鳥、ブルーインコなど、さまざまな動物を飼育されていました。そのためか、家族や近所から「動物園長」と言われるほどでした。また、笑い話も紹介されていました。「学校が終わって家に帰ったら、動物の世話など楽しいことがいっぱいあったから宿題をする暇がなかった。それで次の日、よく廊下に立たされました。水を入れたバケツを持って立っていると、アメンボが入ってくることがあって、思わずニタッとすると、それを見た先生から『立たされているのに何を笑っている』と怒られました」と。また、体は弱かったが、けんかは強かったので、ガキ大将的な存在だったことや、下級生を守り、いざとなったら、強い奴と対抗しましたと。雅雄少年は、卑怯を嫌う芯のあるガキ大将であった、と書かれてありました。

野山を駆け回り、動物たちと触れ合った少年期の体験が、のちにサル学に進みたいいくつかの理由の一つではありますが、野山に足を運び、五感を働かせながら見たり触ったり匂いを嗅いだり、耳を澄ましたりしながら、自然の不思議さや謎と向き合っていたのではないのでしょうか。指1本で画面にふれると目の前には計り知れない情報が一度に飛び込んでくる現代社会。便利な世の中であるからこそ、その便利さを生活の中に取り入れるのはいいことですが、便利は不便ともいいます。本物との出会いが少なく、人間関係の希薄化がいわれているなか、人の痛みに寄り添えることが出来る、心豊かな園児児童の育成に努めていかなければ、と記事を読んで思いました。

追記:(サル学に進まれたもう一つの理由に、戦争体験がありました。人はなぜ戦争という残虐な行為をするのか。人間とは、どうい動物なのかを立ち返って探してみようと思われました・・・)



鉛筆の持ち方

①親指・人差し指・中指の3本の指で軽く持つ。②鉛筆は人差し指に沿わせるように③親指や中指が前に出していないように持つ。

教室には出来るだけ毎日行き、何を学んでいるか参観していますが、鉛筆の持ち方が大変気になっています。握るようになって持っているため、余分な部分に力が入り、肩こりの原因になったりします。「握り鉛筆」と私は言っていますが、改善を期待したいです・・・